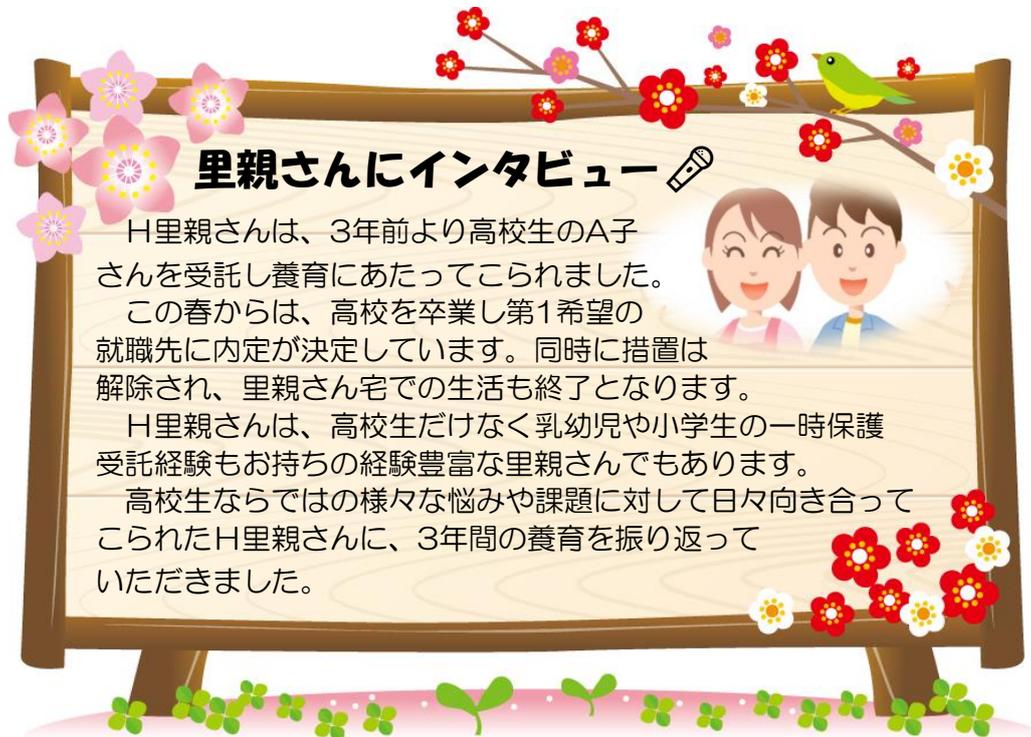


まつもと版 里親だより vol. 5

暦の上では春とはいえ、まだまだ寒さが続きますが、お元気でお過ごしでしょうか。春の訪れを待ちこがれる今日この頃です。今回は、養育里親さんに日々心掛けていることをおうかがいしました。



Q.高校生ならではの難しさはありましたか？

A.高校入学当初、義務教育とは違い学業の面ではっきり点数で表わされてしまう事が、本人にも強く負担になっていたのではないのでしょうか？それを私たちまで一緒に騒ぎ立てたら、本人の居場所がなくなってしまう…そんな時は児相と高校にお任せできたので、私たちは楽しい家庭生活を育むことに専念できました。一步違ったら、子どもに苦しい思いばかりさせることになったのではないかと思います。

Q.乳幼児や小学生とは異なるところはありましたか？

A.個人としての人格を尊重し、自主性を育てることに重点を置きました。
(小さなお子さんでも主体的な権利を持っているのはもちろんのことですが)

Q.里親さんの家族や親族の皆さんに変化はありましたか？

A.最初家に来たときは、Aさんは人見知り激しく、人の中に一緒に加わることも苦手でしたが、大家族の中で何にでも誘いいつも一緒に行動することで、本当の家族のようになりました。孫たちも自分の姉のように慕っています。

Q.これから高校生になる児童を委託する里親さんにメッセージをお願いします。

A.子どもにとって一番自分を作る大切な時期です。毎日のおしゃべりが自然に楽しくできるように心掛けて、何を考え、悩んでいるか、こっちの弱みや本気も晒け出し、寄り添っていくことが大切です。

美味しいおやつや食事も、時間があれば一緒に手伝ってもらいながら、料理のコツも教えたり、子どもの喜ぶ方法を考えながら、一緒に楽しむことが一番だと思います。

書籍のご紹介

まだまだ寒い日が続きますが、暖かいお部屋で、里親養育にご尽力されている皆さんはじめ、多くの方々に読んでいただきたい本をご紹介します。

『ミンのあたらしい名前』

ジーン・リトル著 田中奈津子訳

カナダの女の子の物語です。里親家庭をいくつも移り変わる生活を経験し、心を閉ざしがちだった里子が大切な人たちとの出会い、動物とのふれあいによって変わっていきます。

我が国と比較して諸外国の里親委託率が高いことの一つの要因として、既に施設が減少しており、養育不調を繰り返したとしても里親委託せざるをえない事情があると聞いてはいました。物語を通してそのような境遇にある子どもの気持ちを考える良い機会になりました。

『月の光の届く距離』

宇佐美まこと著 光文社

この物語は、予期せぬ妊娠をした高校生、美優の話から始まります。妊娠がわかった時には墮胎できない状態で、美優はお腹の子を産むという決断をします。そして、福祉の支援によって、奥多摩にあるゲストハウス「グリーンゲイブルズ」に預けられます。そこで、苦しい過去や様々な事情を抱えた人々と出会います。

各章で語り手が変わり、グリーンゲイブルズにいる人たちの人生が紐解かれていくところが面白いです。この物語はフィクションですが、改めて、家族って何だろうと考えさせられる内容だと思いました。

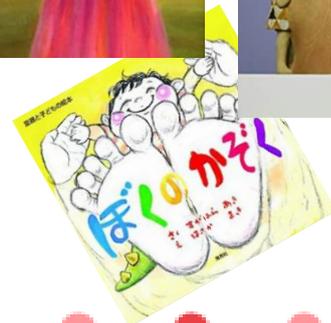
里親と子どもの絵本『ぼくのかぞく』

菅原亜紀著 保坂真紀絵 海鳥社

作者自ら養育里親として子育ての傍ら、クラウドファンディングにより出版された絵本です。

『ぼくをうんでくれたママと、いまいっしょにいるママ どちらもほんとうのママなんだから どちらもぼくのことだからものだから』

里親家庭で育った大人の方が『家族が2つあるんじゃない、両方まとめて自分の1つの家族なんです』とあるように、特別でも何でもなし、1つの家族のお話です。幼少期の真実告知や、里子の自己肯定感を高めるために、また里親制度の理解が深まるおすすめの絵本です。



下記松本児童相談所ホームページでもご覧いただけますので、ご利用ください。

<https://www.pref.nagano.lg.jp/matsujido/index.html>

(松本児童相談所 🔍 右記QRコードもご利用ください)

松本版里親だよりへのご意見、ご投稿等、お気軽にお寄せください。

松本児童相談所

住所：松本市波田9986 電話：0263-91-3370

